

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



### 合田 直弘

11月4日と5日の両日にわたってカリフォルニア州のサンタアーダ競馬場で行われた第33回ブリーダーズCで、最も優秀な成績を挙げた騎手に与えられる「ビル・シユーメーカー賞」を受賞したマイク・スマス(51歳)が、今月のこの「ラムの主役である。

1着10点、2着5点、3着3点、4着1点というポイントシステムを設け、ブリーダーズC全13競走を通じて最多ポイントを得た騎手が受賞するという、単純明快なシステムを通じて選ばれるのが、ビル・シユーメーカー賞だ。スマスは、初日のG1ダートマイルをタマーケーズで、2

日目のG1フライリー&メアスプリントをフaineストシティで、そしてイベントのメイン競走であるG1クラシックをアロゲイトで制して、3勝をマーク。彼以外に複数のレースに勝った騎手はひとりもいなかったから、これだけでも他の追随を許さなかつたのに、初日のメイン競走であるG1ディスタフでソングバードに騎乗し鼻差で勝利を逃したのを含めて、2日間を通じて2着も3回あり、まさにぶつちぎりのポイントを稼いでの受賞となつた。

ビル・ホールダーとソングバードがブリーダーズC史に残る名勝負を演じたG1デイスタフは、判定写真を引き伸ばしてようやく決着したほどの大接戦で、それがデビューアー12戦目にして初の敗戦となつた

ソングバードの鞍上にいたスマスはレース後、顔を歪めて悔しさを露わにした。その後、頬を歪めて悔しさを露わにした。その24時間後、1.9倍の大本命に推されたカリフォルニアクロームを、アロゲイトが仕留めにかかった刹那の、スマスの騎乗ぶりはまさに鬼気迫るもので、馬自身の底知れぬ潜在能力もさることながら、前日の無念を晴らす機会はここにしかないと思い極めた鞍上の執念が、アロゲイトをしてアメリカ競馬の頂点に立たせたものと筆者は受け止めた。

マイク・スマスのビル・シユーメーカー賞受賞は、2012年、2013年に続く3度めのことだった。

50代後半を迎えた凡人の筆者として、スマスが51歳にしてなお、勝負に対する高いモチベーションを維持し続けていることが、まずは驚異的だと思う。

そして、高いモチベーションがあるからこそ、2日間で8つのG1に騎乗してもまったくバテない肉体が維持できるのである。

経験に培われた確かな技術を持ち、肉体も壮健で、なおかつメンタルも強いといふ、心技体いずれもが卓越した水準にあらう。1998年に背中を傷めたことをきっかけに専属トレーナーを雇い、週に6日は決められたメニューをこなしている」というが、10代や20代の若者たちと対等に動ける秘訣であると、スマスは明かしてくれたことがある。

父ジョージ・スマスも騎手で、祖父が持つ牧場で生まれ育ったというスマスは、歩くよりも早く馬に乗りはじめたという。父

オーターホースを使つた草競馬で乗り始めたのが11歳の時で、16歳になると正式にプロデビュー。以降、今日まで積み重ねた勝ち星は5300を超える。エクリプス賞の受賞が2回。2005年にジャコモで制したケンタッキーダービーを含めて、3冠の全てで勝利を收めている他、ブリーダーズCにおける通算勝利数は、今年の開催を終えて25となり、通算15勝のジョン・ベイリーを大きく引き離して、ここでも断然のトップに立つている。すなわち、大舞台に抜群に強いのがマイク・スマスなのだ。肝っ玉の据わったこの男でなければ、最後方一気の競馬を貫いて20戦19勝の成績を残したゼニヤツタの主戦は、務まらなかつたはずだ。

殿堂入りを果たしたのは、2003年のことだった。

殿堂入りを果たしたのは、2003年のことだった。

彼を見ていると、武豊騎手、横山典弘騎手、蛯名正義騎手、内田博幸騎手といった、40代後半を迎えている日本のトップ騎手たちが、これから彼らの全盛期を迎えるてもおかしくはない気がしてくるのである。